

運動部活動における補欠制度

－哲学的分析をもとにした批判的検討－

須藤巖彬 （ 群馬大学 ）

1. はじめに

近年、運動部活動の議論は「生徒の苦しみ」から「教育の苦しみ」に移行してきている。しかし、未だなお「生徒の苦しみ」の一つである「補欠」問題は取り残されている。同じ運動部員の中で「する」活動を主に行う「登録選手」と「支える」活動を主に行う「補欠選手」が存在していることは、運動部活動の分断に映る。このような分断は「補欠制度」に起因しているだろう。そこで、本研究では「中学・高校において補欠制度を内包する団体種目を行う運動部活動」を研究の中心対象とし、文献調査を通して「補欠制度」を批判的に検討することを目的とする。

2. 「補欠選手」の疎外可能性

現在の日本のスポーツ振興では、生涯スポーツの推進を目的に、本人の関心と適性のもとに自発性を持ってスポーツを行うことが求められている。しかし、「補欠選手」が自らの関心と自発性の下で「登録選手」を「支える」活動をしているとは考え難い。本来的には、選手本人の意思や生涯スポーツの方針に鑑みるとスポーツは「する」活動に重きが置かれるべきである。また、運動部活動が教育の一環として行われることが示されていることを踏まえ、教育法規の観点に照らして考えれば、スポーツを「する」ことに対して機会均等や平等の理念が担保される必要がある。しかし、現状の「補欠制度」をはらむ運動部活動の在り方では、本人の意思に反して「補欠選手」がスポーツを「する」機会に制限がかけられてしまっている。

3. 「補欠選手」のスポーツからの疎外

現在、多くの運動部活動が行っているスポーツは競技スポーツである可能性が高い。競技スポーツの内在的目的は「強さの決定」である。したがって、競技者の内在的目的は「勝利を追求するというあり方そのもの」であるといえる。つまり、

競技という概念は「試合」との結びつきが前提となっているのである。また、一般に「試合」であるように思われる「練習試合」は、実際には「試合形式の〈練習〉」でしかない。「練習」は「試合」において勝つために「強くなる」ことを目的として行われる活動であり、「試合」に従属している概念である。これらのことから、「試合」に出場する機会のない「補欠選手」は、原理的には競技スポーツをする競技者とは言えず、スポーツをする権利を剥奪されているといえる。

4. 運動部活動における能力と「運」の関係

メリトクラシー信仰が未だ根強い現在の運動部活動において、「補欠制度」は「登録選手」と「補欠選手」をメリトクラティックな基準で選別する正当な制度であるとも思われている。すなわち、「登録選手」と「補欠選手」の地位は自らの能力と努力に値するという考えである。

しかし、実際には「登録選手」の地位を含む成功は、遺伝的要因や環境的要因、更には時間的・空間的に限定された「現在」という要素などのスポーツ実施者に付帯する「運」によって影響を受けている。その上、スポーツ現象そのものにおいても「運」は存在している。このことを踏まえると、「登録選手」と「補欠選手」の選別結果は、本人の能力や努力のみによるものではなく、本人の意思の及ばない「運」が大きく影響しており、自分の能力と努力のみの結果であるとは言えないのである。

5. おわりに

以上の分析より、運動部活動に「補欠制度」が存在することは、本人の意思の及ばない「運」によって、スポーツを「する」ことが出来ない「補欠選手」を生み出してしまう可能性があるため、「生涯スポーツ」や「機会均等」等の理念から乖離してしまうということが結論づけられた。